

チョウクラゲ



△
“大きな羽”を持
つチョウクラゲ

このクラゲは胴体の両側に二つの羽のような袖状突起が付いていて、海中でチョウのように羽ばたける。名は体を表すというように、チョウクラゲと呼ばれている。
一般的にクシクラゲの仲間

久保田 信

55



は遊泳力がないが、その中でチョウクラゲは素早く移動できる変わり種だ。普段は繊毛の束である櫛板(くしいた)でゆったり泳ぐが、いざという時はこの“大きな羽”を使う。海中で捕らえようとすると、ばたばたと羽ばたいてリズムカルに泳いで目前を逃げていく。
袖状突起の内側に見える細かいたくさんの筋が筋肉である。袖状突起は見ての通り、本体より大きく長く伸びる。それに加え、筋肉質であるために、この力強い推進力が生まれるのだ。

袖状突起の中には管がぐるりと巡っている。中央の胴体下部にある、平たく大

きく開く口で、餌となるプランクトンをのみ込み、胃袋で消化して、この管へと栄養を送ってくるのだ。獲物を捕る時は袖状突起で囲み込むともいう。

画像の個体は数センチほどで、まだ幼くて小さい。成長すると最大で10センチほどになるが、体形はこのまま変わらない。このような小さい時は薬品で固定して保存できる。普通、この仲間は標本に残せないが、このクラゲは筋肉質で小さい時はさらに溶けにくいからだろ。

袖状突起の付け根に突起があるが、これもまだ幼くて短い。ここにも繊毛の束である櫛板が生えている。全部で4カ所に生えており、これを絶えず動かし、かじ取り役をするのである。

体のてっぺんにあるのがただ1個の感覚器。これとこの周りにある特殊な構造で、櫛板の波打ちをコントロールするペースメーカーの役割を果たしている。

(京都大学准教授)